

低湿地帯の集落における空間構成に関する研究 ーヴィエンチャン北部、VK集落の事例を通してー

Keywords

集落空間 屋敷構え
血縁関係 宗教

K07108 吉川 平



1. 研究背景・目的

ラオスは、多くの民族集団が居住する多民族国家である。それぞれの民族集団は、異なる歴史的背景や生活習慣をもち、独自の世界観のもとに生きている。そうした様態は、衣服や暮らし方、宗教だけでなく、住居や集落などの居住空間からもよみとることができる。よって同じような自然環境に暮らしていても、世界観に応じて居住空間にさまざまな違いがみられる。

本研究では、ラオ人の居住空間をかたちづくるさまざまな事柄に着目し、生業や宗教、血縁関係など、多面的に集落の空間構成を分析し、その特性を明らかにしていく。特に、屋敷構えは集落空間を構成する重要な要素であり、屋敷構えや屋敷周辺の空間を中心にして、集落空間の領域性や構成原理を探ろうと試みる。

2. 調査研究の概要

2.1 調査概要

本研究は現地調査に基づいている。現地調査は、2010年9月4日から10月3日の計30日間にわたり、ヴィエンチャン北部に位置するVK集落において実施した。

調査内容は、集落図・住居の平面図・断面図・屋敷図の作成、村人へのインタビュー調査である。インタビュー項目は、家族構成・宗教・就寝形態・食事形態・耕作物・家畜・住居形成・移住・その他についてであり、各住居の住人から聞き取った。



図2 集落図

2.2 調査地概要

調査地であるVK集落は、ヴィエンチャン市内から車で2時間ほどのところにあり、ヴィエンチャン県ゲオウドン郡の低湿地帯に位置する(図1)。ここで暮らす人びとは、タイ・プワンという民族集団である。VK集落は、1968年にベトナム戦争を逃れるためにシエンクアンから移動してきた人々によって創設された。

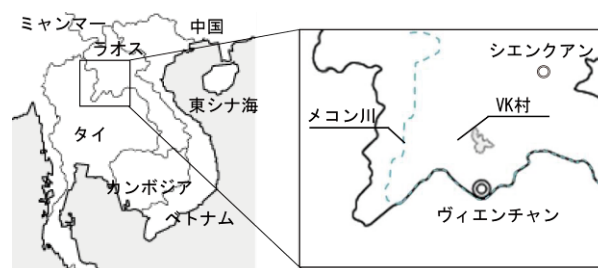


図1 調査地位置

VK集落は、道路を挟むように形成されている。集落の東側には大きな川が流れており、その水を利用した水稲耕作が生業の中心となっている。集落は川と水田の間に位置している(図2, 3)。

また、住居のまわりには広大な屋敷地が形成されており、それぞれが柵や塀で囲まれている。ほとんどの住居に共通して、屋敷地の中に付属屋や家畜小屋などが配置されている。

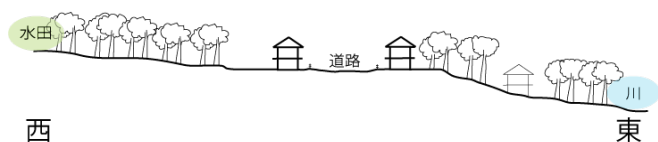


図3 地形略断面図

シエンクアンから移住する際、土地の条件として川があり、農業が営める場所が選定された。移住当時は現在の集落から300メートルほど離れた川沿いで生活していた。しかし、ベトナム戦争が終わる1972年から1975年にかけて、ヴィエンチャンやシエンクアンに戻るなどして、一部の住民が移動した。また、1981年の川の洪水をきっかけに現在の位置へ徐々に移動した。集落形成は1997年までに完了し、現在に至る。VK集落は高床式住居が37戸、高床式で1階がRC造住居が8戸、RC造住居が16戸の計61戸、292人（男149人、女143人）の規模をもつ。

3. 空間構成からみた集落空間の形成

3.1 住居形式

高床式住居の空間構成は、床下部分と床上居住部分の2つからなる。床下部分は主に倉庫や物置となっている。床上の居住部分は、5つの空間に分類できる。①玄関前にある屋根つき露台、②中央に位置する団らん・接客スペース、③寝室、④炊事場、⑤屋根のない露台、の5つである（図4）。

高床式で1階がRC造住居の空間構成は、1階居住部分と2階居住部分の2つからなる。1階居住部分は、5つの

空間に分類できる。①玄関前にある屋根つき露台、②中央に位置する団らん・接客スペース、③寝室、④炊事場、⑤物置やトイレ、の5つである。2階居住部分は、主に寝室として使用される（図4）。

RC造の空間構成は、4つの空間に分類できる。①中央に位置する団らん・接客スペース、②寝室、③炊事場、④物置やトイレ、の4つである（図4）。2階がある場合は、主に寝室として使用される。

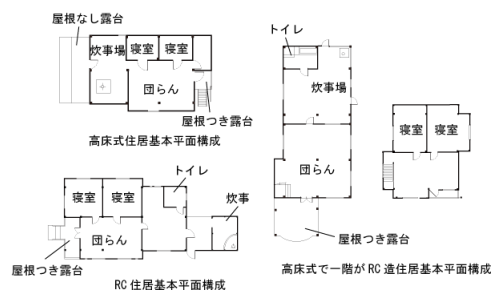


図4 住居形式ごとの基本平面構成

3つの住居形式をみると、平面の空間構成はどの住居形式でもほとんど変わらないことがわかる。概ね入口の側から、団らん・接客スペース、寝室、炊事場と配置されている。炊事場は、入口からは直接見えないようになっている。入口と炊事場の位置関係は、必ず対極となる。入口と炊事場は、ほとんどの住居において、最も離れた位置にある。

3.2 屋敷構成

VK集落の屋敷構成の特徴は、母屋があり、母屋の周辺にトイレや鶏小屋といった付属屋が点在していることである。そして、それらの建物を竹や木材でできた柵で

表1 屋敷地一覧表

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	22	23	24	25	26	27	28	29
30	31	32	33	34	35 36	37	38	39	40	42	43	44	45
46	47	48	49	50	51	52	53	54	55 57	56	58	59	60
61	62												

○ 生活空間
● 家畜小屋空間
▲ 入口

囲っている。これは、ほとんどの住居に共通する。しかし、VK-9,37,38のように家畜が屋敷外に出ていく心配がない住居、住居を森林の地形に沿って建設している住居は、完全に柵で囲まれていない（図5）。

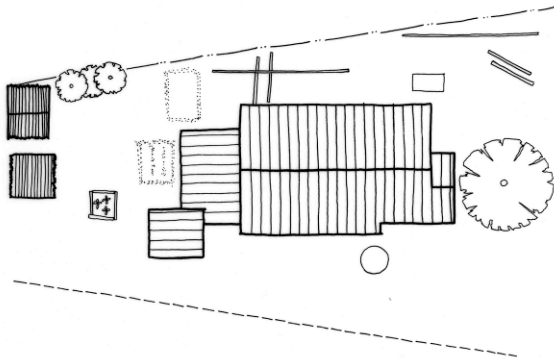


図5 柵で囲まれていない住居例（VK-9）

住居の配置は、柵の入口に1番近い場所に母屋を設ける傾向がある（表1）。換言すれば、母屋を道路に1番近いところへ配置しているともいえる。その反面、トイレ、鶏小屋といった付属屋は、母屋の後ろに配置している住居が多い。さらに、トイレや水場、米倉といった生活に密接な関係をもつ建物は、豚や水牛などを飼育する家畜小屋と比べると住居の近くに位置することが多い。家畜小屋は、住居の背後、敷地の端、入口から奥まった場所に配置されることが多い。

3.3 入口の向き

VK集落では、住居への入り方として、階段を経由して住居内へ入る方法と地上から住居内へそのまま入る方法がある。

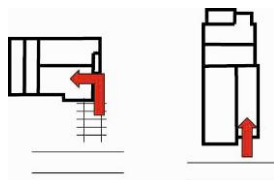


図6 入口の向き

階段を使う場合は、道路から階段（道路に対して垂直）まで進む。階段を上りきってから向きを変えて戸口から住居へ入る。この入り方は、高床式住居に多くみられる。地上からそのまま入る場合、道路側に面した入口（道路に対して垂直）にまっすぐに進み、そのまま住居へ入る事例が多い（図6）。これはRC造に多くみられる。

図6で示した住居への2種類の進入方向が同じと考えると、全61戸中、59戸（97%）が当てはまる。このことから、住居の入口の向きは、道路からアプローチしやすいことを優先していると考えられる。

3.4 建設年代

VK集落の住居は、1965年に建設されたVK-57を筆頭に、寺院の周辺で、さらに道路沿いから建設されていった。寺院周辺が高密度になると、寺院と反対側の道路沿いにも住居の建設が始まる。その後、小学校の付近や寺院の裏側にも住居が建設されるようになる。

そのような住居建設のプロセスを、住居形式別に見ると図7のようになる。高床式住居は、洪水をきっかけに、道路沿いに移動してきた。90年代になると、多くの住居が移動している。RCを用いた住居は、集落の中心に位置する寺院の周辺から増えている。

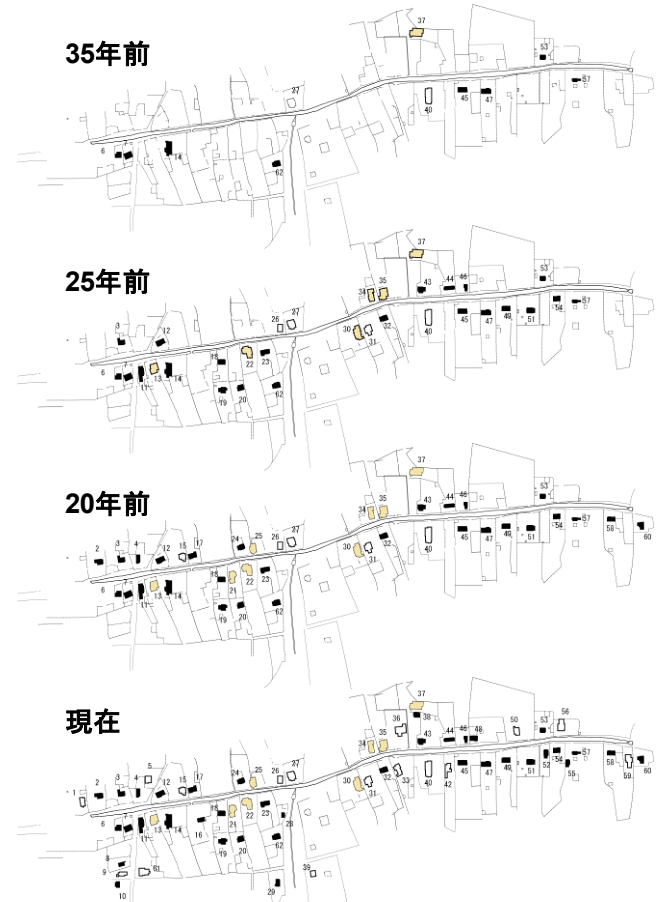


図7 建設年代

4. 血縁関係からみた領域の形成

表2 土地の取得方法

土地を開拓した	国や集落の土地を 購入・譲り受けた	親族から購入 ・譲り受けた
23 戸	5 戸	24 戸

土地の取得方法として、約半数の46%が親族から土地を取得している（表2）。

VK-11を筆頭とする親族集団をみると、息子夫婦（VK-1,61）に土地を譲り、比較的近い場所に住居が配置されている（図8）。

つぎに、VK-37を筆頭とする親族集団をみる。
VK-38は、VK-37から土地を譲り受けている。そのため、VK-37の住居の近くに住居を構えている。しかし、VK-13は、姻族関係の義父から土地を譲り受けているため、VK-37と離れた場所に住居を構えている。VK-59は、VK-60から土地を購入しており、離れた場所に位置している（図8）。

これらのことから、親族内での土地の相続や譲渡によって居住場所が確定し、集落全体の住居配置に影響を与えていることがわかる。

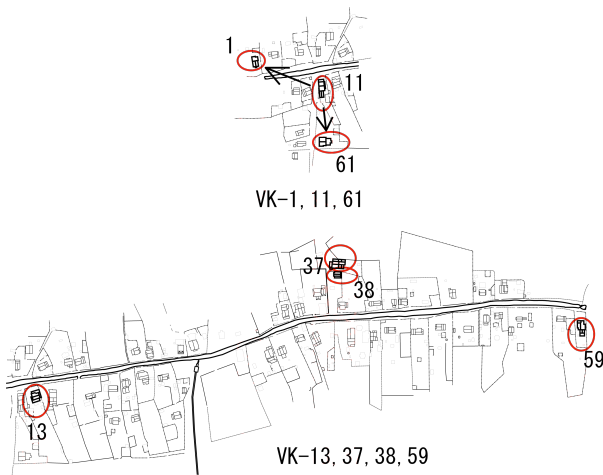


図8 血縁による住居配置

5. 宗教からみた集落空間の形成

5.1 VK集落のアニミズム

多くの住居では、炊事場の炉の近くにサオニヤーと呼ばれる柱がある。サオニヤーには、ニヤーハイカーオと呼ばれる霊が祀られ、儀礼で米や蒸した鶏を柱に貼付ける。供え物をしないと、ニヤー（おばあさん）が、住人に病気をもたらすといわれている。供え物をしている限り、住人が健康に生活できると同時に、他の霊が入らないように家を守ってくれるという意味も含まれている。

5.2 サオニヤーの位置

サオニヤーのある住居46戸の内、そのすべてで、炊事場の炉の付近にサオニヤーがあることが確認できた。一方、残りの15戸にはサオニヤーがない。その理由としては、いずれつくる予定があるが立替えや引越しがあるために現在はないこと、または、頻繁に引越しをするため、サオニヤーを祀らなくなったことがある。

また炉の付近にサオニヤーがあることは、炊事場が一棟型か分棟型かに関わらず、同じである。さらに住居形式からみても、サオニヤーの位置は変わらず同じである。

6. 考察

VK集落では、住居空間・屋敷空間・集落空間の各レベルを「生活空間」と「生命の維持や再生産に関わる空間」の2つにわけてとらえることができる。前者は、人々が生活を営む空間であり、後者は生命の産出に関わる空間である。

VK集落は外部社会の影響を受けて集落空間が時代とともに変化してきた。しかしサオニヤーの位置はその変化の渦中においても変わらなかった。それは集落の人にとってサオニヤーが普遍的なもので、何かを象徴するものだからではないだろうか。筆者は、サオニヤーが食事をつくる場所にあることから、生命の産出・創造の象徴なのではないかと考える。

この生命にかかわる空間が全体の中でどこに位置づけられているのかを見てみると、住居空間では生活空間の奥にあることが全件に共通している。この空間序列を屋敷・集落のレベルへスケールアップして当てはめると、住居空間と同様に、生命の産出・再生産に関わる空間は生活空間の奥側にあることがわかった。

屋敷空間では、家畜の育成を行う家畜小屋が生命の再生産と関わる空間となり、母屋や水場などの生活空間の奥に位置する。さらに集落空間では、川や田といった自然資源で生命が産出され、再生産される空間となり、屋敷地自体が生活空間となる（図9）。

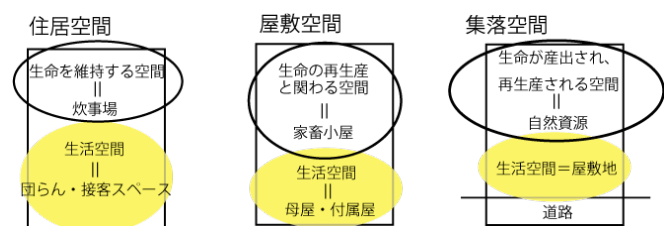


図9 空間構成概念図

しかし集落の構成は先述の空間序列のみで決定されるものではない。伝統的な原理は、外部社会からの影響を受けながら日々変化している。VK集落におけるこうした変化はその形成過程より、集落を貫通する基幹道路をとおして外部から流入し、集落内に浸透していつている。以上より伝統的な原理と外部社会からの影響が絡み合うことで、現在のVK集落は形成されているといえよう。

参考文献

- 1) ラオス文化研究所 『ラオス概説』 株式会社めこん 2003年
- 2) 野中健一 『ヴィエンチャン平野の暮らし』 株式会社めこん 2008年